

令和 8 年 7 月 8 日  
丹後農業改良普及センター

## 農作物の高温少雨対策の徹底について

近畿地方では、本日 7 月 8 日梅雨明けが発表されました（平年より 11 日早い、昨年より 11 日遅い）。大阪管区気象台の季節予報によりますと、7 月の気温は平年よりも高いと予想されており、高温による農作物への影響や水不足の発生が懸念されます。

つきましては、以下の事項を参考に、農作物の管理と作業時の健康管理等について留意願います。

### 1 水稲

- (1) 出穂期は生育期間を通じて最も水を必要とする時期であり、この時期の水不足は稔実を著しく不良にするため、湛水管理に努める。
- (2) 地域全体で計画的な用水管理を心掛け、ほ場が水不足にならないように注意する。

### 2 豆類

- (1) ダイズ及び紫ずきんは、7 月下旬頃から開花期を迎える。開花期以降、着莢や子実肥大に水分を必要とするため、土が乾燥しないように早朝や夕方に畝間かん水を行う。この時期の水不足は、落花・落莢を促進し、稔実莢数や一莢粒数の減少を招くため注意する。
- (2) 畝間に長時間滞水が続いた場合は、酸欠等で根が弱り病害発生や開花期の落花を助長するため、明きよ等により表面排水を促す工夫を施す。
- (3) 開花期以降、子実の肥大に伴ってカメムシ類や子実害虫の被害が増えるため、若莢期から 7～10 日間隔で計 4 回程度防除を行う。特に乾燥条件下でハダニ類やハスモンヨトウの発生が増加するため、ほ場を観察し早期防除に努める。

### 3 野菜・花き

- (1) かん水は生育状態等を考慮しつつ、早朝・夕方に実施する。施設内でのかん水は湿度が高くなりやすくなることから、曇天時には日中に換気するなどして湿度を下げる。また、地温上昇の抑制や土壤水分の保持を図るため、適宜マルチや敷わら等を活用する。
- (2) 除草や下葉の除去等によって、ほ場内・施設内の風通しを良くする。
- (3) 施設栽培は、妻面・側面を開放するとともに、遮光・遮熱資材等を使用し、施設内の温度上昇を抑制する。遮光資材は、果実の日焼けや葉やけの防止にも有効である。循環扇は、局所的な高温・高湿空気の滞留を防ぎ、室内温度・湿度の均一化等の効果が期待できる。
- (4) ハダニ類、アザミウマ類等が多発しやすいので、発生初期の防除に努める。

### 4 果樹

- (1) 高温で土壤が乾燥すると、葉などからの蒸散作用が抑えられ高温障害が助長されるため、十分なかん水を行う。この際、時間をかけてかん水し、地下に水を浸透させる。
- (2) 水分の競合を避けるため、園内の除草を行う。土壤の表面の乾燥を防ぐため、刈り取った草を利用した敷草やマルチを行うことも検討する。
- (3) ハダニ類・カメムシ類の防除を行う。なお、間もなく収穫を迎える樹種では、農薬の「収穫前日数」に十分注意する。

### 5 茶

- (1) 干ばつ害を軽減するため、うね間や株元の敷草等により、土壤水分の保持に努める。
- (2) 気温が高い時期にはハダニ類やヨコバイ、アザミウマ類等の害虫の被害が大きくなりやすいため、発生を確認し、的確に防除する。

### 6 作業者の熱中症対策等

- (1) こまめに水分と塩分を補給するとともに、身体を適度に冷やすことができる冷たいタオル等を備える。
- (2) 作業中の温湿度の変化がわかるよう、温度計、湿度計等を設置する。
- (3) 日陰などの涼しい場所に休憩場所を確保し、十分な休憩時間を確保する。
- (4) 可能であれば朝夕の比較的涼しい時期に作業を行い、気温の高い時間帯の作業を避ける。
- (5) 透湿性、通気性に優れた作業服や空調服等を着用する。